

## 『山海経』に見る王者の戦い

—— 蚩尤像を中心に ——

## 要 旨

中国神話を代表する黄帝と蚩尤の闘争伝説は、『山海経』を含む数多くの書物に見られる。これらの説話について、これまでの研究は主に黄帝伝説の解明や、黄帝と蚩尤の原初的形態を復元するなど、様々な目的で進められてきた。一方、蚩尤側に注目するとしても、ほとんどは蚩尤を酷評している。小論では比較的疎かになっている蚩尤像に力点を置く。『山海経』に見る黄帝と蚩尤の闘争説話を手掛かりに、他の諸資料に見る蚩尤像、並びに『山海経』に見る他の闘争説話を取り上げて考察を行い、『山海経』に見る蚩尤像と一般的に定着した蚩尤像の異同を比較する。蚩尤像の変貌を確認し、その意味を検討する。

## 目 次

- はじめに
- 第一章 黄帝と蚩尤について
- 第二章 『山海経』に見る黄帝と蚩尤の闘争説話
- 第三章 黄帝と蚩尤の闘争説話の変貌
- 第四章 『山海経』に見る他の闘争説話
- 終わりに

## はじめに

一般的に戦国時代から秦朝、漢代にかけて執筆されて成立したと考えられている『山海経』は、中国の最も古い地理誌とされている。著者は伯益<sup>1)</sup>に仮託されるが、実際は多数の著者の手によるものだと思う。内容は古代中国人の伝説的地理認識を示すものであり、各地の神話、地理、動物、植物、鉱物、呪術、宗教、歴史、医療、民俗及び民族など様々な内容が記載されている。現在の版本は西晋の郭璞が注釈を加えた十八巻のものである<sup>2)</sup>。もとは絵地図に解説文を組み合わせ、『山海経図』と呼ばれていたが、魏晋以後に失われて現存せず、現在残されている画像は『山海経』の本文から逆算された後世の想像によるものであり、伝来する系統によって全く違う画像となっているものも存在すると思われる。

小川琢治氏によると、「抑も山海経とは如何なる書であるか。張騫鑿空の挙ありて後、太史公は其所謂ゆる崑崙なるものの存在を疑つてはゐるが、東方朔一足の鳥を識り、劉向貳負の尸を認めてからは、其記載する所の怪異の類に或は信を措くに足るものありとされ、西漢の学者には往々之を読むものがあり、劉歆の校讐して之を上るに及んで、初めて斯書の定本が出来た。東漢の初、王景、治水の任に当るや、明帝景に賜ふに山海経、河渠書、禹貢図を以てした

尹 青 青\*

のは、当時に在つて有用の書であつたことの証左である<sup>(3)</sup>、「現存の五蔵山経を、劉氏校定の時に載せた所に比較するに、其差尤も甚しく、今文多きこと五千余言、而かも尚ほ逸文が諸書に散見する。今の山海経を以て晋唐の古文を考へんとすることすら既に困難なことである。況んや兩漢当時の簡冊を推さんとすることは尤も至難のことといはねばならぬ。若し夫れ山海経と並び行はれた山海図に至つては、王景は之を用いて治水の法を講じ、陶潜は之を披きて博物の助としたらしいが、今や全く佚して尋ぬるに由がない<sup>(4)</sup>。

『山海経』には神々、妖怪に関する空想的な記述が多く含まれ、古の中国各地の神話を反映していると考えられるため、数多い中国神話の重要な基礎資料となつている。中国神話を代表する黄帝と蚩尤の闘争伝説は、『山海経』以外にも、多く見られる。これまで『山海経』等に見る黄帝と蚩尤の闘争説話については、主に黄帝伝説の解明を目的とした研究が進められてきた。各文献に見る黄帝像、蚩尤像を手掛かりに、それらの原初的な形態を復元することが試みられた。またその原初的な人物像がどのように後世の人間化、歴史化、合理化などを理由に形を変えてきたのかを検討する研究も行われた<sup>(5)</sup>。

黄帝と蚩尤の闘争をめぐる見解は、研究者個々の視点を反映する形で多方面から様々な結論が提出された。しかし、湯浅邦弘氏が指摘するように、「この神話の原初的形態や意味を探究せんとする作業が、既にかんがりの合理化・人間化を経たとされる諸資料に依らざるを得ないという点<sup>(6)</sup>」、「黄帝・蚩尤の戦いが主として黄帝神話説明の一環として取り上げられる結果、どちらかと言えば黄帝側に力点が置かれ、蚩尤への注目が今一つ疎略になつている点<sup>(6)</sup>」、「蚩尤の側に注目する際、蚩尤『作兵』伝説を前提として、蚩尤を、兵乱を興し黄帝に敵対した悪者と捉える場合がほとんどである<sup>(8)</sup>」点などが問題である。

本稿は、これらの指摘の内、蚩尤側に注目する際、蚩尤を悪者としてとらえる場合がほとんどであることについて特に着目し、比較的疎かにされた蚩尤像に力点を置きたい。『山海経』に見る闘争説話、主に黄帝と蚩尤の闘争を語るものを中心としつつ、他の諸資料に見る蚩尤像、並びに『山海経』に見る他の闘争説話を取り上げて考察を試みたい。諸資料のテキストは主に『四庫全書』・『統修四庫全書』（上海古籍出版社）所収のものを参照する。標点は引用者により、中国語言説の引用は拙訳にて示し、必要に応じて原文を注に挙げる。書名・引用文などの字体は適宜改める。

## 第一章 黄帝と蚩尤について

まずは従来の黄帝像・蚩尤像について確認する。

伝説上の帝王黄帝は、三皇の治世を継ぎ、中国を統治した五帝の最初の帝であるとされる。また、三皇のうちに数えられることもある。『史記』によると、黄帝は少典の子、姓は公孫、名は軒轅である<sup>(11)</sup>。後に姓を姫に変えたため、姫軒轅と呼ばれた。または軒轅氏、有熊氏、帝鴻氏とも呼ばれ、『山海経』に登場する怪神帝鴻と同一のものとする説もある。蚩尤を討つたあと、「諸侯はみな軒轅を尊んで天子とし、神農氏の子孫に代わらせた。これが黄帝である。黄帝は天下に従わないものがあるとそなたびに征伐し、平定したら立ち去つた。山を開いて道を通じ、落ち着いて生活したためしかなかった<sup>(12)</sup>」。

黄帝以降の四人を含めた五帝と、夏、殷、周と秦の始祖を始めとした数多くの諸侯が黄帝の子孫であるとされている。さらに後世になると、中国の多くの姓氏が始祖を夏、殷、周の帝王や諸侯としたので、現在も数多い漢民族が黄帝を先祖として仰いでいる。清代の末期に、革命派は黄帝が即位した年を紀元とする黄帝紀元と称する曆を用いて、清朝への対抗意識を示したこともある。また黄帝は中

国医学の始祖として、現在でも尊崇を集めている。漢の時代では、著者不明の医学書は、黄帝のものとして權威を付けるのが流行した。現存する中国最古の医学書『黄帝内経素問』、『黄帝内経靈樞』も、黄帝の著作とされている。ほかにも文字、音楽、曆法、衣服、鼎、井、指南車などの発明者とされている。このように黄帝は中華民族の始祖としてだけでなく、様々な事物の創始者としても位置付けられている。

蚩尤も中国神話に登場する神である。『路史』によると姓は姜であり、炎帝の後裔である<sup>(13)</sup>。最もよく知られている伝説は黄帝と戦い負けたことである。獣の体に銅の頭と鉄の額を持ち、また四目六臂で人の身体に牛の頭と蹄を持つとか、砂や石や鉄を喰い、同じ姿をした兄弟が七十二人または八十一人いたとされている。対黄帝戦争については、神農氏の時、乱を起こし、兄弟の他に無数の魑魅魍魎を味方に付け、風雨、霧や煙などを巻き起こして黄帝と涿鹿の野で戦い、濃霧を起こして敵を苦しめたが、黄帝は指南車を使って方位を示し、遂に蚩尤を捕え殺したといわれている<sup>(16)</sup>。

この時、蚩尤の味方したのは九黎族や夸父<sup>(17)</sup>だった。最終的に捕らえられた蚩尤は、諸悪の根源として殺されたが、そのとき逃げられるのを恐れて、手枷と足枷を外さず、息絶えてからようやく外されたという。身体から滴り落ちた鮮血で赤く染まった枷は、その後「楓」に化した。以後毎年秋になると楓が赤く染まるのは、蚩尤の血に染められた恨みが宿っているからだという。それから赤旗を「蚩尤旗」と言い、劉邦がこれを軍旗に採用したことは『史記』に見られる<sup>(19)</sup>。

蚩尤を語る説話は春秋時代の書物に多く見られるが、矛盾が多い。古の九黎族の部族の王であり、漢民族の神話では軍神でもある。『史記』では蚩尤は「兵主神」に相当するとされ、戦の神として始皇帝、劉邦などによって祀られた<sup>(20)</sup>。また戦争で必要となる武

器、所謂「五兵」（戈、殳、戟、酋矛、夷矛）を發明したという。蚩尤が反乱を起こしたことで、これ以降は法を定めて反乱を抑えなければいけなくなったとも言う。また黄帝は蚩尤を殺した後、蚩尤の像を軍旗に描き、諸侯はその軍旗を見て戦わず降伏したという。

以上、従来の黄帝像と蚩尤像について検討した。蚩尤を語る説話で最も多いのは黄帝との闘争を語るものであり、黄帝と蚩尤が同時に登場する説話は、ほぼ両者の戦いを語るものである。続いては黄帝と蚩尤の闘争を語る説話について、主に『山海経』に見るものを中心に、蚩尤像の検討を試みる。

## 第二章 『山海経』に見る黄帝と蚩尤の闘争説話

まずは「大荒東経」に次の説話がある。

大荒の東北の隅に山があり、名は凶壑土丘である。応竜は南極に住み、蚩尤と夸父を殺したので、天に復帰することができなくなった。そのため下界はしばしば早魃<sup>(21)</sup>だった。早魃の時に応竜のかたちをまねると、やがて大雨がふりだす<sup>(22)</sup>。

この説話によると、応竜が南極に住んでいるのは、蚩尤と夸父を始末したため、天に戻ることでできなくなったからである。この応竜が黄帝側に属することは、後に挙げる説話で分かる。蚩尤・夸父と闘争して神力を失ったのか、雨を司る応竜が天に復帰できなくなり、人間界は幾度も早魃に襲われた。これは黄帝と蚩尤の闘争説話の一部として位置付けられる。最初に述べたが、『山海経』は地理誌のつもりで書かれたものであるため、この説話は「地理解説、干魃起源譚に包括される」と湯浅邦弘氏は指摘している<sup>(22)</sup>。

また「大荒南経」に次の説話がある。

宋山なるものがあり、赤蛇がいて、名を育蛇という。山には木が生えていて、名を楓木という。楓木は蚩尤が捨てた足枷、手枷がこれに化したものである。<sup>(23)</sup>

これは直接には黄帝と蚩尤の闘争を描いていないが、蚩尤の敗戦後が見える説話である。黄帝に敗れた蚩尤は囚われ、蚩尤の血で赤く染まった手枷足枷は、蚩尤を始末した後で黄帝に捨てられ、楓林に化した伝説を反映している。この類の伝説は他にも「蚩尤旗」、「蚩尤戯」と呼ばれるものの由来説が存在するが、また後で詳述する。

他に「大荒北経」に以下の説話がある。

係昆の山なるものがあり、共工の台がある、射るものは北に向けることを恐れた。青衣をきている人がいて、名は黄帝女魃という。蚩尤は兵乱を起こして黄帝を討った。そこで黄帝は応竜に命じて冀州の野で蚩尤を攻めさせた。応竜は水を貯え、蚩尤は風伯と雨師をまねいて、暴風雨をほしいままにした。黄帝が天女魃を召喚すると、雨が止んでついに蚩尤を殺した。魃は二度と天に帰ることができず、居るところには雨が降らない。叔均がこのことを黄帝に申し上げたので、後に（黄帝は）魃を赤水の北に住ませた。叔均はそこで田祖となった。だが魃は時々逃げ出すので、魃を追い払おうとする人は告げた、「神よ、北にかえりたまえ、まず水道をきれいにし、大溝小溝をよく浚えよ」と。<sup>(24)</sup>

応竜は蚩尤を殺してしまうと、さらに夸父をも殺し、やがて南方に去って住んだので、南方には雨が多い。<sup>(25)</sup>

最初の説話は黄帝と蚩尤の闘争を比較的詳しく描いている。神話的要素が濃厚であり、応竜、天女魃、風伯、雨師などが登場する。黄帝が応竜を遣わし、天女魃を召喚するのに対して、蚩尤は風伯と雨師の助力を得て対抗する。戦いの勝敗は風雨、旱魃によって決められ、魃に風雨を止められ蚩尤は敗死する。闘争の原因は蚩尤が兵乱を起こしたとされる。蚩尤が黄帝に戦争を仕掛け、黄帝は蚩尤を討伐したという構造である。場所は冀州の野と明記している。後半部分では黄帝の勝利に貢献した天女魃の惨めな結末が語られている。天女魃は天界に戻れず、下界の人間によってあちこち追い払われた。勿論この部分も旱魃の起源譚としてとらえられる。

次の説話は簡略に応竜が蚩尤と夸父を始末したことを語る。応竜も天界に復帰できず、南方に去って住むしかなかった。故に南方には雨が多い。この内容を「大荒東経」に見る説話と比較すると、応竜が蚩尤を始末した末、天に復帰できず、人間界に滞在せざるを得なかった点では一致する。またこの説話も地理を記録しているようにとれる。ただ「大荒東経」の説話では応竜が天に戻れず南極に住んだため、南方には雨が降らなかったのに対し、ここでは応竜が南方に去って住んだため、南方には雨が多かつたということになっている。この差異の原因として考えられるのは、『山海経』は多数の人が手掛けたものだからである。なお、湯浅邦弘氏は黄帝が天から魃を召喚して蚩尤に勝つのも、応竜と天女魃が天界に戻れなかったのも、密接な天人関係を表しているとする。<sup>(26)</sup>

見落としの残る可能性はあるが、さしあたり『山海経』に見る黄帝と蚩尤の闘争説話は以上である。『山海経』に見る蚩尤は黄帝に匹敵する存在であることが分かる。ここでは他の資料に見る人間離れした外見や、残虐無道な性格などは一切語られていない。軍神として確立された蚩尤像も『山海経』には見えない。

続いては、黄帝と蚩尤の闘争説話が後世で変貌を起こしたことを

考察し、蚩尤像について考えたい。

### 第三章 黄帝と蚩尤の闘争説話の変貌

『山海経』以外にも、黄帝と蚩尤の戦いを語る説話は多く見られる。両者の戦いを描いた説話は、神話的要素が豊富なものから、完全に人間として描かれたものまであり、細部も様々であるが、現れる人物関係によって以下の三種類に分類することができる。

- ・蚩尤は兵器を作って黄帝を討った。黄帝は応竜に迎え撃つように命じ、双方は冀州の野で戦い、蚩尤は敗れて殺された。<sup>(27)</sup>
- ・黄帝が阪泉の戦いで炎帝に勝った後、蚩尤は反乱を起こし、黄帝は涿鹿の野で蚩尤を破り、神農の代わりに天子となった。<sup>(28)</sup>
- ・赤帝（炎帝）は蚩尤に駆逐され、黄帝にそのことを訴え、黄帝と協力して蚩尤を中冀で殺した。<sup>(29)</sup>

また黄帝は蚩尤と何回戦っても勝てず、最終的に天女の九天玄女から力を借りて、蚩尤に勝つための戦法を得たというような説話もある。<sup>(30)</sup> 九天玄女の力を借りる話は『山海経』「大荒北経」に見る黄帝が天女魃を召喚して蚩尤に勝った説話と似ている。これもまた儒教の主張する天と人とは密接な関係があり、相互に影響を与えあっているという思想、すなわち天人相関説を反映しているのかも知れない。

ほかに黄帝と蚩尤を語る説話には、数は少ないが闘争説話ではないものも存在する。例えば『管子』には蚩尤は天の道をよく知っていて、黄帝は彼を使臣として天の道を理解したという説話がある。<sup>(31)</sup> また『韓非子』によると、蚩尤は風伯や雨師と一緒に、黄帝の臣下として道を開いた。<sup>(32)</sup>

そもそも各文献の時代や資料的性格が異なるため、差異が生じる

のも当然の現象であることは否定できない。しかし、これらの微妙な違いから、蚩尤像変貌の一端が窺える可能性はある。『山海経』「大荒北経」に見る黄帝と蚩尤の闘争説話では、応竜、天女魃が黄帝の勢力に属し、蚩尤の方には風伯と雨師がいた。仮にこの風伯、雨師が『韓非子』に見る蚩尤と一緒に黄帝のために道を開いた風伯、雨師だとすると、二つの説話は関連性を持つ可能性がある。もともと黄帝に仕えた神々が、何かを原因に蚩尤を首領として反乱を起こしたと考えられる。前の章で述べた『山海経』「大荒東経」に見る「応竜は南極に住み、蚩尤と夸父を殺した」や、「大荒北経」に見る「応竜は蚩尤を殺してしまうと、さらに夸父をも殺し」のような夸父を蚩尤と並べて語る説話からすると、夸父もこの闘争の関係者に違いない。後で述べるが、夸父が対黄帝の闘争と直接関係を持つ原因は、夸父も炎帝の後裔であることが考えられる。<sup>(33)</sup>

多くの説話では蚩尤の戦死を結末としている。黄帝は蚩尤を軍神とし、象を軍旗に描いて諸侯を征服した。皮肉なことに黄帝に敗れて軍神としての蚩尤像が確立したのだ。

### 第四章 『山海経』に見る他の闘争説話

『山海経』に見る闘争説話は黄帝と蚩尤の戦い以外にも複数存在する。例えば『山海経』「海外西経」に形天が黄帝と闘争を起こした説話がある。

形天と帝がここに至って神争いをした、帝は形天の首を斬り、それを常羊の山に葬った。形天は乳を目となし臍を口となして、盾と鉞を持って舞った。<sup>(34)</sup>

袁珂氏によると、「帝」は黄帝を指す。この事は蚩尤の件と似ていて、また常羊山は軒轅の丘の近くで、黄帝の威霊が及ぶところで

あるので、当然黄帝以外にこれに相応する者はいない<sup>(35)</sup>。蚩尤や夸父に似て、形天も黄帝と鬪争を起こした一人である。黄帝は形天の首を切り落とし、常羊山に埋めたが、形天は乳を目にし、臍を口にし、左手には盾を構え、右手には鉞を持ち、振り回した。蚩尤が風伯、雨師を使い、夸父の協力を得て黄帝と戦ったのと違い、形天は自らの力のみで戦った。その姿は勇猛かつ頑強で、まさに陶淵明が「形天干戚を舞はし、猛志固より常に在り」と讃えた通りである<sup>(36)</sup>。

『宋書』によると炎帝神農は常羊山に生まれた<sup>(37)</sup>。『路史』にも神農が常羊山に生まれた説話がある<sup>(38)</sup>。この常羊山は同時に形天の首が埋められた場所でもある。また『路史』によると、形天は神農の属神或いは臣下である<sup>(39)</sup>。故に、形天説話は炎帝説話と関係性を持つと考えられる。黄帝に敗れた炎帝のために、形天は干戚を舞わせたのかも知れない。この点に関しては、黄帝が炎帝に勝った後、炎帝の後裔として蚩尤が黄帝と戦った説（『史記』「五帝本紀」と一致する。ほかに黄帝の後裔である顓頊と帝の座を争ったが失敗し、怒りのあまり不周山にある天柱を折った共工の説話などもある<sup>(40)</sup>。これらの鬪争説話は系統からすると黄帝と炎帝の鬪争という範疇に含まれる。『呂氏春秋』によると、「戦いは昔からあるものであり、黄帝と炎帝は昔水と火を用い対立した。共工は数回乱を起こしたので、五帝は（共工と）争った<sup>(41)</sup>。『淮南子』によると、「炎帝は火災を起こした。故に黄帝は（炎帝を）とらえた。共工は水災を起こした。故に顓頊は（共工を）殺した<sup>(42)</sup>。したがって、黄帝と炎帝の鬪争は古から語られたことは確認できる。形天説話も共工説話も黄帝と炎帝の鬪争の延長線に位置付けられる。炎帝が敗れた後、その後裔（共工）または属神或いは臣下（形天）が反撃の狼煙を上げたのも、筋は通る。そうすると、黄帝と蚩尤の鬪争に夸父が炎帝の後裔として参戦したのも、おかしくはない。つまり見方を変えようと、黄帝と蚩尤の鬪争説話も実は黄帝と炎帝の鬪争説話の一部に過ぎないという

ことが考えられる。

## 終わりに

以上、『山海経』に見る黄帝と蚩尤の鬪争説話を手掛かりとして、他の諸資料に見る蚩尤像、並びに『山海経』に見る他の鬪争説話について考察を試みた。黄帝と蚩尤の鬪争説話は戦国から唐、宋の時代まで絶えず、幾度か変貌を起こし、千年以上伝えられて来た<sup>(43)</sup>。中国古代の神話的説話の中で、最も規模と影響の大きい説話だと言っても過言ではなからう。神話上、黄帝と蚩尤は神であるが、言い伝えから考えれば両者は原始部族の首領であり、黄帝と蚩尤の鬪争説話は中国の原始部族の戦争を反映したものである。

中国語に「成王敗寇」という言葉がある。つまり「成功すれば王となり、失敗すれば賊となる」の意味である。黄帝との闘いに負けた蚩尤も、結果的には遙か昔から「賊」と見なされ、語られてきた。諸悪の根源として描かれた蚩尤像だが、もともと民間では特に黄帝を尊び蚩尤を貶すようなことはしなかったように見える。

むしろ蚩尤は民衆の俗信として信仰されたい。重複になるが、劉邦が挙兵した時、黄帝と蚩尤の両方を祀ったことは『史記』に見られる。また『述異記』によると、太原の民間で蚩尤を祭る時は牛の頭を使わなかった<sup>(44)</sup>。『皇覽』によると民は常に十月に蚩尤の墓を祭った<sup>(45)</sup>。蚩尤を捉えた手枷足枷が「楓林」になったという伝承があったことは前にも述べたが、他にも雲気のうち旗の形をした軍事に関するものを「蚩尤旗<sup>(46)</sup>」と呼び、頭に角があるという蚩尤の形状を模する遊戯を「蚩尤戯<sup>(47)</sup>」と呼んだ。蚩尤の血、骨などに関する伝説も蚩尤に対する情念を反映しているのだろう。

ただ後世にこの歴史が語られるとき、統治階級の正統性を求め、勝者の黄帝を褒め讃え、敗者の蚩尤を貶めたのだと考えられる。黄帝は中原地区を統一し、華夏族<sup>(48)</sup>の正統となった。そのため、史籍特

に儒教の典籍は敗者の蚩尤を酷評したのでろう。蚩尤は獣の体に銅の頭と鉄の額、四目六臂で人の身体に牛の頭と蹄、砂、石、鉄を食べる暴虐非道な人物像となった。さらには「後世の聖人は蚩尤の姿を酒器にあしらって貪欲を戒めた」<sup>(49)</sup>。儒教的な視点で「悪の王」として描かれた蚩尤像だが、『山海経』や『韓非子』などの説話を見ても、蚩尤像はそういうものではない。

一方、『莊子』では神農を除き、黄帝を始めとする歴代の帝王を批判し、蚩尤との闘いも黄帝の不徳がもたらしたとしている<sup>(50)</sup>。この批評は黄帝と蚩尤の闘争説話を評する他の立場と全く違うと言える。これはおそらく、黄帝をはじめとする歴代帝王を顕彰する儒家の政治思想に対する反発であろう。故に蚩尤を特筆せず、専ら黄帝側の不徳を批判したのでろう。

最後に一つ疑問に思うのは、黄帝と炎帝の闘争説話に現れる炎帝、夸父、形天らも敗北または戦死するのに、蚩尤のように特筆され、酷評されることはほとんどなく、蚩尤だけがこのように取り上げられたことである。別稿において、さらにこの点を追究したい。

\*イン セイセイ 文学研究科中国言語文化専攻博士課程後期課程

二〇一六年一月五日 査読審査終了

### 註

- (1) または益と呼ばれ、古代中国の伝説上の人物である。帝舜に仕え、帝禹の治水を手伝ったとされる。前漢の劉歆(後に名を秀と改めた)が伝わっていた三十二編の『山海経』を校訂して十八編とした。『四庫全書』所収『山海経』の提要では「我々は謹んで『山海経』十八巻を案する。晋の郭璞による注の始めに『劉歆が校正して上奏し伯益の著であると称した』とある」と記している。『四庫全書』第一〇四二冊、上海古籍出版社、一九八七年六月、一頁。

原文は「臣等謹案『山海経』十八巻、晋郭璞注首有『劉秀校上奏称爲伯益所作』。」

- (2) 『晋書』、『隋書』や『新唐書』では郭璞本『山海経』を二十三巻とするが、現存の十八巻は後人が郭璞本の巻数を劉歆の奏中の数字に合わせたもので、散逸はしていないと紀昀らは断じた。前掲『四庫全書』第一〇四二冊、二頁。

原文は「晋書本伝、隋唐二志皆云二十三巻。今本乃少五巻、疑後人併其巻帙、以就劉秀奏中一十八篇之數、非缺佚也。」

- (3) 小川琢治『支那歴史地理研究』、弘文堂書房、一九二八年、六七頁。

- (4) 前掲 小川琢治『支那歴史地理研究』、六八頁。

- (5) いくつか例を挙げておきたい。

・森三樹三郎氏によると、黄帝と蚩尤の原初的な形態はそれぞれ皇帝(皇天上帝)と齊地(今の山東省)の戦争神であり、『史記』の黄帝神話は、五行説が流行した後に成立したものであり、周王朝の成立を反映している。(森三樹三郎『支那古代神話』、大雅堂、一九四四年三月)

・袁珂氏は黄帝は中央の上帝であり、蚩尤は勇敢な巨人族・天上の悪神・炎帝の後裔であるとす。蚩尤は祖先の炎帝の称を襲用して黄帝に敗れた炎帝の為に復讐戦を行うが敗死するとす。(袁珂『中国古代神話』、商務印書館、一九五七年七月)

・森安太郎氏は黄帝の原初的形態を始神始帝・龍蛇・雷雨の神とし、蚩尤の原初的形態を虺とし、黄帝神話は黄帝が姜姓炎帝に戦勝したと同様、田氏齊(高祖黄帝)が姜姓齊(炎帝・兵神蚩尤)の信仰に一撃を加える為に作為した伝説であるとした。(森安太郎『黄帝伝説…古代中国神話の研究』、京都女子大学人文学会、一九七〇年)

・玄珠氏によると、黄帝と蚩尤の原初的形態は善神と巨人族・悪神であり、蚩尤伝説の完全なる逸亡は隋代以降である。(玄珠『中国神話研究』、国立北京大学中国民俗学会民俗叢書、東方文化書店、一九七一年)

・貝塚茂樹氏は黄帝も蚩尤も風を支配する神であり、ふいご技術を身に付け青銅兵器の製造を知る部族の長であるとし、闘争の勝敗の鍵が風を自由に操る巫女を獲得できるか否かという点において、

古代メソポタミアのマルドゥクのティアマト伝説と一致すると指摘する。(貝塚茂樹『中国古代の伝承』、中央公論社、一九七六年九月)

・王孝廉氏によると、黄帝と蚩尤の原初的形態は火神と水神であり、黄帝と蚩尤の戦いは火神と水神の戦いであり、『山海経』「大荒東経」に見る応竜が蚩尤、夸父を殺したのも、夸父に風雨の神の性格があるのが原因である。(王孝廉『中国的神话世界』、作家出版社、一九九一年三月)

・御手洗勝氏は黄帝を嬴姓族の水神、蚩尤を悪神と定義し、黄帝と密接な関係を持つ龍、特に黄帝の武器であった応竜が水を蓄えて蚩尤に対抗したという伝承は、水神としての黄帝の本質を露呈するものであるとする。(御手洗勝『古代中国の神々』、古代伝説の研究』、創文社、一九九九年十二月)

(6) 湯浅邦弘「軍神の変容…中国古代に於ける戦争論の展開と蚩尤像」(一)、『島根大学教育学部紀要(人文・社会科学)』二十六、一九九二年、一一八頁。

(7) 蚩尤が武器を創り兵乱を興して黄帝に挑んだ伝説、『山海経』「大荒北経」に見られる。

(8) 前掲 湯浅邦弘「軍神の変容…中国古代に於ける戦争論の展開と蚩尤像(一)」、一一九頁。

(9) 三皇については諸説あるが、主に以下のものがよく知られている。

・燧人、伏羲、神農——(漢) 伏勝(または伏生)『尚書大伝』  
・天皇、地皇、泰皇(人皇ともいう)——(前漢) 司馬遷『史記』  
『秦始皇本紀』

・伏羲、神農、女媧——後漢応劭『風俗通義』、(唐) 司馬貞補『史記』「三皇本紀」

・伏羲、神農、祝融——(後漢) 班固『白虎通義』

・伏羲、神農、黄帝——(西晋) 皇甫謐『帝王世紀』、(南宋) 王昶麟(諸説あり)『三字経』

(10) 五帝についても諸説あるが、主に以下のものがよく知られている。

・黄帝、顓頊、嚳、堯、舜——『史記』「五帝本紀」  
・伏羲、神農、黄帝、堯、舜——『易経』、(前漢) 劉向『戦国策』

・伏羲、炎帝、黄帝、少昊、顓頊——『礼記』、(前漢) 劉安『淮南子』

・少昊、顓頊、嚳、堯、舜——『帝王世紀』

(11) 『史記』「五帝本紀」、『続修四庫全書』第二六一冊、上海古籍出版社、一九九五年三月第一版、一九頁。

原文は「黄帝者、少典之子、姓公孫、名曰軒轅。」

(12) 『史記』「五帝本紀」、前掲『続修四庫全書』第二六一冊、二十頁。

原文は「諸侯咸尊軒轅爲天子、代神農氏、是爲黄帝。天下有不順者、黄帝從而征之、平者去之、披山通道、未嘗寧居。」

(13) 『路史』、前掲『四庫全書』第三八三冊、一〇九頁。

原文は「阪泉氏蚩尤、姜姓、炎帝之裔也。」

(14) 『述異記』、前掲『四庫全書』第一〇四七冊、六一三頁。

原文は「軒轅之初立也、有蚩尤氏兄弟七十二人、銅頭鐵額、食鐵石、軒轅誅之於涿鹿之野。」

(15) 『太平御覽』卷七十九所引『龍魚河図』、前掲『四庫全書』第八九三冊、七五三頁。

原文は「(龍魚河図) 又曰、黄帝攝政時、有蚩尤兄弟八十一人、并獸身人語、銅頭鐵額、食沙石子、造立兵杖刀戟大弩、威振天下、誅殺無道、不仁不慈。」

(16) 『太平御覽』卷十五所引『志林』、前掲『四庫全書』第八九三冊、二九一頁。

原文は「『志林』曰、黄帝與蚩尤戰於涿鹿之野、蚩尤作大霧、彌三日、軍人皆惑。黄帝乃令風後法門機、作指南車以別四方、遂擒蚩尤。」

(17) 現在の苗族の祖先といわれている。

『山海経』「海外北経」に「夸父は太陽と競争して、太陽に追いついた。口が乾いて水を飲みたくなり、黄河と渭水を飲み尽くしたがなお足らず、北の大きな沢で水を飲もうとしたが、到着せぬ先に道で渴いて死んでしまった。その杖を棄てると、(杖は) 化して鄧林となった」とある。前掲『続修四庫全書』第一二六四冊、二〇五頁。

原文は「夸父與日逐走、入日。渴、欲得飲、飲于河渭。河渭不足、北飲大澤。未至、道渴而死。棄其杖、化爲鄧林。」



この説話は後に述べる応龍が蚩尤と夸父を殺した説話と矛盾するが、『山海経』は一人の手によるものではないため、説話の系統が異なる可能性は考えられる。なお、今回は蚩尤を語る説話がメインなので、夸父については詮索しない。

(19) 『史記』「高祖本紀」に「高祖」は黄帝の祠を立て、蚩尤を沛庭で祭り、生贄の血を鼓と旗に塗り、幟は全て赤だった」とある。前掲『統修四庫全書』第二六一冊、一一八頁。

原文は「祠黄帝、祭蚩尤於沛庭、而豊鼓旗、幟皆赤。」

(20) 『史記』「封禅書」に「そこで始皇帝は東へ進み海岸地帯を旅して、名山・大川及び八神を礼をもって祭り、仙人の羨門という輩を求めた。(略)第三は兵主といい、蚩尤(の家)で祭る。蚩尤(の家)は東平陸の監郷にあり、斉の西境にある。第四は陰主といい、三山で祭る……」とある。前掲『統修四庫全書』第二六一冊、四一二頁。

原文は「於是始皇遂東遊海上、行禮祠名山大川及八神、求僊人羨門之屬。(略)三日兵主、祠蚩尤。蚩尤在東平陸監郷、齊之西境也。四日陰主、祠三山……」

また「高祖は始めて旗揚げをした時、豊の粉楡の社に祈り、沛を従えて、沛公となった。そして蚩尤を祭り、鼓と旗に生贄の血を塗った」とある。前掲『統修四庫全書』第二六一冊、四一六頁。

原文は「高祖初起、禱豊粉楡社、徇沛、爲沛公。則祠蚩尤、豊鼓旗。」

(21) 『山海経』「大荒東経」、前掲『統修四庫全書』第一二六四冊、二二八頁。

原文は「大荒東北隅中有山、名曰凶犁土丘。應龍處南極、殺蚩尤與夸父、不得復上、故下數旱。旱而爲應龍之狀、乃得大雨。」

(22) 前掲 湯浅邦弘「軍神の変容…中国古代に於ける戦争論の展開と蚩尤像(一)」、一一〇頁。

(23) 『山海経』「大荒南経」、前掲『統修四庫全書』第一二六四冊、二二二頁。

原文は「有宋山者、有赤蛇、名曰育蛇。有木生山上、名曰楓木。楓木、蚩尤所棄其桎梏、是爲楓木。」

(24) 『山海経』「大荒北経」、前掲『統修四庫全書』第一二六四冊、二二三頁。

九頁。

原文は「有係昆之山者、有共工之臺、射者不敢北郷。有人衣青衣、名曰黄帝女魃。蚩尤作兵伐黄帝、黄帝乃令應龍攻之冀州之野。應龍蓄水、蚩尤請風伯雨師、縱大風雨。黄帝乃下天女曰魃、雨止、遂殺蚩尤。魃不得復上、所居不雨。叔均言之帝、後置之赤水之北。叔均乃爲田祖。魃時亡之、所欲逐之者、令曰、神北行。先除水道、決通溝瀆。」

(25) 『山海経』「大荒北経」、前掲『統修四庫全書』第一二六四冊、二二三頁。

原文は「應龍已殺蚩尤、又殺夸父、乃去南方處之、故南方多雨。」

(26) 前掲 湯浅邦弘「軍神の変容…中国古代に於ける戦争論の展開と蚩尤像(一)」、一一二頁。

(27) 『山海経』「大荒北経」を参照。

(28) 『史記』「五帝本紀」を参照。

(29) 『逸周書』「嘗麦解」第五十六に「蚩尤は炎帝を駆逐し、涿鹿の河で争い、九隅を全て占領した。炎帝は恐れ、黄帝を説得し、蚩尤を捉えて中冀で殺した」とある。前掲『四庫全書』第三七〇冊、四三頁。

原文は「蚩尤乃逐帝、争于涿鹿之河、九隅無遺。赤帝大懼、乃説于黄帝、執蚩尤殺之于中冀。」

(30) 『太平御覧』卷十五所引『黄帝玄女戦法』に「黄帝玄女戦法」に曰く、黄帝は蚩尤と九回闘ったが九回とも勝てなかった。黄帝は泰山に帰ると、三日三晩濃霧が漂った。一人の婦人が現れ、人の頭で鳥の体をしていた。黄帝は稽首して数回拜み、伏せたまま起きなかつた。その婦人は「私は玄女である、貴方は何を問おうとするのか」と言った。黄帝は「私は全ての戦闘に勝ちたい」と言った。そして戦法を手に入れた」とある。前掲『四庫全書』第八九三冊、二九二頁。

原文は「黄帝玄女戦法」曰く、黄帝與蚩尤九戰九不勝。黄帝歸于泰山、三日三夜霧冥。有一婦人、人首鳥形、黄帝稽首再拜、伏不敢起、婦人曰、吾玄女也、子慾何問。黄帝曰、小子慾萬戰萬勝。遂得戦法焉。」

(31) 『管子』「五行」に「昔、黄帝は蚩尤を得て天の道を理解した」、「蚩尤は天の道を理解しているので、当時黄帝は彼を使者とした」とある。前掲『統修四庫全書』第九七一冊、三四九頁。

原文は「昔者黄帝得蚩尤而明於天道」、「蚩尤明乎天道、故（黄帝）使爲當時。」

(32) 『韓非子』「十過篇」に「昔、黄帝が鬼神を泰山の西に集めた時、象車に乗り六頭の蛟龍に引かせ、畢方は両側の車轄に付き添い、蚩尤は前駆を勤め、風伯は塵を払い、雨師は水を撒き、虎狼は先行し、鬼神は随行し、騰蛇は地にはい、鳳凰は空を覆うようだった。盛大に鬼神を集め、清角の曲を作った」とある。前掲『統修四庫全書』第九七二冊、三一頁。

原文は「昔者黄帝合鬼神於西泰山之上、駕象車而六蛟龍、畢方並鏘、蚩尤居前、風伯進掃、雨師灑道、虎狼在前、鬼神在後、騰蛇伏地、鳳凰覆上。大合鬼神、作爲清角。」

(33) 『山海經』「大荒北經」に「后土は信を生み、信は夸父を生んだ」とある。前掲『統修四庫全書』第二二六四冊、一三九頁。

原文は「后土生信、信生夸父。」

また『山海經』「海内經」に「炎帝の妻——赤水の子——聽訖は炎居を生み、炎居は節並を生み、節並は戲器を生み、戲器は祝融を生んだ。祝融は江水に降り住んで共工を生み、共工は術器を生んだ。術器の頭は方形で平らかであり、土地を回復して江水にすんだ。共工は后土を生み、后土は噎鳴を生んだ」とある。前掲『統修四庫全書』第二二六四冊、二四六頁。

原文は「炎帝之妻赤水之子聽訖生炎居、炎居生節並、節並生戲器、戲器生祝融。祝融降處于江水、生共工。共工生術器、術器首方顛。是復土穰、以處江水。共工生后土、后土生噎鳴。」

この二つの説話から夸父は炎帝の後裔であると思われる。

(34) 『山海經』「海外西經」、前掲『統修四庫全書』第二二六四冊、二〇二頁。

原文は「形天與帝至此爭神、帝斷其首、葬之常羊之山、乃以乳爲目、以臍爲口、操干戚以舞。」

(35) 袁珂『古神話選釈』、人民文学出版社、一九七九年十二月第一版、

一四四頁。

原文は「帝：指黄帝；因其事與蚩尤事類、常羊山又在軒轅之丘附近、爲黄帝威靈所及地、自非黄帝無足當之。」

なお「形天」は「刑天」ともいう。袁珂氏によると、「天」は甲骨文と金文の中では人の首を表していて、「刑天」はおよそ断首の意である。

(36) 陶淵明の詩「讀山海經」に「形天舞干戚、猛志固常在」とある。

(37) 『宋書』「符瑞志」に「炎帝神農の母は女登といい、華陽で遊んでいる時、龍の頭をした神が常羊山で彼女に作用をもたらし、炎帝を生んだ」とある。前掲『四庫全書』第二五七冊、四七八頁。

原文は「炎帝神農氏、母曰女登、遊於華陽、有神龍首感女登於常羊山、生炎帝」

(38) 『路史』に「神農の）母安登は常羊で神を感じ、神農を列山の石室で生むと、九個の井が自ら現れた」とある。前掲『四庫全書』第三八三冊、八九頁。

原文は「母安登感神于常羊、生神農于列山之石室、生而九井出焉。」

(39) 『路史』に「神農は）形天に扶犁の曲と豊年の歌を作り、祈念するように命じた、これを下謀」とある。前掲『四庫全書』第三八三冊、九三頁。

原文は「乃命形天作扶犁之樂、製豊年之詠、以薦釐來、是曰下謀」

(40) 『列子』「湯問篇」に「その後共工は顓頊と帝になるのを争い、怒りて不周の山にぶつかり、天の柱を折って、地の綱を絶てしまった」とある。前掲『四庫全書』第一〇五五冊、六一五頁。

原文は「其後共工氏與顓頊争爲帝、怒而觸不周之山、折天柱、絶地維。」

また『淮南子』「原道訓」に「昔、共工の力は、不周の山に触れ、地を東南に傾けてしまった」とある。前掲『四庫全書』第八四八冊、五一二頁。

原文は「昔共工之力、觸不周之山、使地東南傾。」

他にも共工説話は各時代に多数存在する。従来洪水を起す水神とされた共工であるが「国語」では伏羲、女媧と同時代の神とされる。『淮南子』では舜の時代に洪水を起こし、『山海經』では禹の時

一代にも現れる。

なお、共工も炎帝の後裔であることは注三三を参照。

(41) 『呂氏春秋』巻七、前掲『四庫全書』第八四八冊、三三三頁。

原文は「兵所自來者久矣、黃炎故用水火矣。共工氏固次作難矣、五帝固相與爭矣。」

(42) 『淮南子』「兵略訓」、前掲『四庫全書』第八四八冊、六七六頁。

原文は「炎帝爲火災、故黃帝擒之。共工爲水害、故顛頊誅之。」

(43) 前掲の袁珂『古神話選釈』一三九頁に「黃帝と蚩尤の戦争は、我が国古代の一大神話伝説である。この神話伝説の記録は、戦国初年に始まり、広まって發展変化を経て、唐宋の時代になっても絶えることはなく、一千年以上を経ており、実に我が国の最も規模が大きく影響の大きい神話伝説である」とある。

(44) 『述異記』、前掲『四庫全書』第一〇四七冊、六一三頁。  
原文は「太原村落間、祭蚩尤神、不用牛頭。」  
牛の頭を使わないのは蚩尤が人の体に牛の頭をしているという伝説があるからだと考えられる。これは炎帝神農が伝説上牛の頭をしていて、蚩尤は炎帝の後裔であるのとも一致する。

(45) 『皇覽』「冢墓記」、前掲『統修四庫全書』第一二二冊、三頁。  
原文は「蚩尤冢在東平郡壽張縣闕鄉城中、高七丈、民常十月祭祀之。」

(46) 『呂氏春秋』「明理」に「その雲は（略）あるものは植物のように長く、色は上が黄色で下が白であり、その名は蚩尤の旗である」とある。前掲『四庫全書』第八四八冊、三三一頁。

原文は「其雲狀有（略）有其狀若衆植華以長、黃上白下、其名蚩尤之旗。」

『史記』「天官書」に「蚩尤の旗は箒に似て後部が曲がっていて、旗のようである。（蚩尤の旗が）現れると王者は四方を征伐する」とある。前掲『統修四庫全書』第二六一冊、四〇二頁。

原文は「蚩尤之旗、類彗而後曲、象旗。見則王者征伐四方。」

(47) 『述異記』、前掲『四庫全書』第一〇四七冊、六一三頁。

原文は「今冀州有樂名蚩尤戲。其民兩兩三三、頭戴牛角而相舐。」

(48) 漢以前の時代に中原の黄河流域に暮らした部族で、漢民族を構成する主体でもある。

(49) 『路史』、前掲『四庫全書』第三八三冊、一〇九頁。

原文は「以故後代聖人著其像于尊彝彝、以爲貪戒。」

(50) 『莊子』、前掲『四庫全書』第一〇五六冊、一四九頁

原文は「然而黃帝不能致德、與蚩尤戰於涿鹿之野、流血百里。」

